



大阪早稲田倶楽部 NEWS



にぎわい倶楽部祭

大阪城公園の「早稲田の森」に集まった面々

大阪早稲田倶楽部の倶楽部祭が4月7日(土)、中央区の玉造稲荷神社会館で開催された。新入会員の歓迎会も兼ねて行われ、会員や校友、家族ら56人が参加した。続いて大阪城公園にある「早稲田の森」に場所を移し、五分咲きの桜のもと親交を深めた。

大阪早稲田倶楽部は大正9年(1920年)創立の伝統ある組織。会員のサロンであり、事務局でもある倶楽部室は、市内のビルなどをいくつか転々とし、現在は大阪新阪急ホテル(梅田)3階の一室となっているが、倶楽部室で折にふれ、懇親の宴が長らく開かれてきた。

資料をひもとけば、昭和43年(1968年)4月6日、堺筋本町の早稲田屋ビルにあった倶楽部室の移転3周年記念として「第一回倶楽部祭」を開催した、とあり、倶楽部祭と銘打っての集いはこの時からと思われる。以降、4月の第一土曜日に毎年のように開催されてきた。酒やおでんなどを持ち寄り、家族も参加してのワイワイ楽しい寄り合いとなっていた。10年ほど前からは大阪城公園内の「早稲田

の森」で花見を兼ねて開かれたりもしたが、昨年は東日本大震災のため開催を取りやめた。

この日は、人見亨理事長(昭和45年理工)が「花見のいい季節に多くのみなさんに参加いただき、感謝している。新しい仲間も迎え、いっそう交流が盛り上がりますように」と挨拶。山澤俱和副理事長(昭和46年法)の音頭で乾杯した。震災から1年を経て、政治も経済も混迷を抜けきれていないが、会場ではようやく訪れた春を満喫するようにあちこちで歓談の輪が広がった。

新人歓迎会は春と秋に開いており、この半年の入会者と昨秋の歓迎会に参加できなかった人を招待し、13人が参加。過半数は平成卒業の若手で、自己紹介では「ざっくばらんな倶楽部で、楽しい人ばかり」との感想を述べる人もあり、先輩、後輩に囲まれて和気藹々とした会となった。

恒例の校歌を高らかに斉唱してお開きとしたあと、歩いて20分ほど先の大阪城公園内の「早稲田の森」へ。昭和44年(1969年)に先輩たちの尽力により植樹整備された桜の名所で、倶楽部祭の愉快なムードそのままに楽しいひとときを過ごした。



大阪に早稲田あり。校歌斉唱で盛り上がる倶楽部祭



新入会員の自己紹介。「稲門であることが誇りです」

～明石の蛸に満腹、満足～ 食べ歩き会



「ああ食べた、食べた」。全員そろってお店の前でハイ、ターコ

「インディアン蛸(たこ)食わない」。大阪の子は昔からこう言うてたと思うんですけど。インディアン蛸つかない。これは大阪に限らず、結構ピュラーでしょう。嘘つかないの語呂が蛸食わないに変わったんでしょ(う)けど。

日本人は蛸好きだ。蛸を食べないのは日本人ではない。日本人を

大阪人に言い替えてもいいかもしれないが、思い込みも決め付けも誤解も偏見も混ぜ混ぜになっても、蛸は王者だ。蛸業界(そん)のあるかい(いな)の回し者と言われようが、蛸は断然、美味しい。だからグルメでは定番、と思いきや足かけ10年、36回目を迎える伝統の「食べ歩き会」ながら、初めての

食材とはびつくりだ。そんなこんなで3月31日、蛸と言えは明石、明石と言えは蛸。誰もが認める蛸の聖地、明石の老舗料亭「人丸花壇」での宴となった。

老いも若きもおじさんおばさんおねえさんも集って26人。蛸のもろみ和え胡瓜の先付に始まって、やわらか煮、酢のもの、活

け蛸の薄造り、いぼ(吸盤)の刺身、蛸の塩辛、天ぷら、蛸めし。これまでも口(に)タコができるほど(?)いっぱい食ってるが、何度食べても美味しいものだ。これでもか(これ)でもかと出てくるが、もつと来い(と)どんどん来いと待ち構える。

隣の席の金子昭治郎さん(昭和25年商)は御年85歳。やわらか煮はいいとしても、歯

ごたえた(と)ぶりの造りはちよつと思ひ、「先輩、手伝いましょか」とお声をかけたが、「何の何の」と総入れ歯でぐにゆり、べろり。完食され、善意(と)実らず。

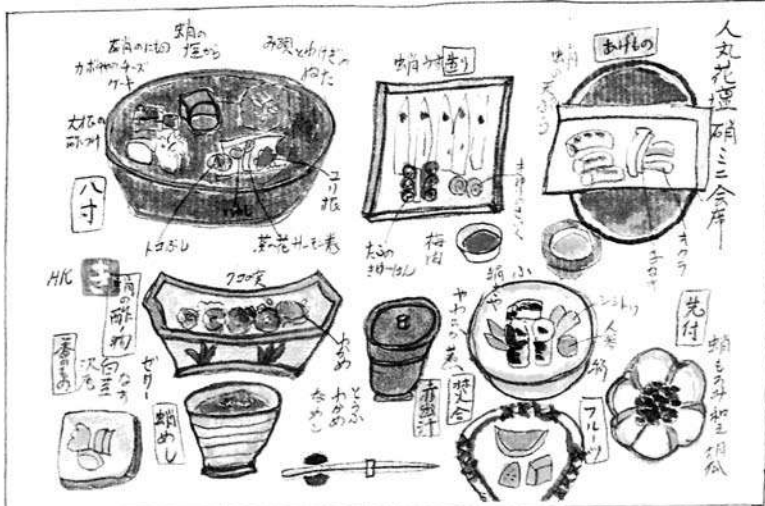
おいしい料理に楽しい会話。食べ歩き会はいつもこうだ。それにこの日は、地元・江井ヶ島酒造の日本酒「神鷹」の熱燗がまた格別だった。みな満腹、満足してお開きとなり、雨上がりで絶景となった明石大橋を眺めたあと、そぞろ歩きで近くの「魚の棚商店街」へ。明石港に水揚げされた昼網の蛸や



魚の棚商店街は活きのいい魚で活気いっぱいだ

「あれだけ食べたからもう入らんよ」。人見亨理事長(昭和45年理工)はそう言いながらものれんをくぐり、1人前15個をしっかり平らげておられました。別腹、別腹。次回は6月16日(土)、東大阪の司馬遼太郎記念館を訪ねたあと、近くのグルメ店での宴となります。乞うご期待。

小林則(昭55年政経)



こんなんを食べてきました(画・北原仁巳さん)

～大阪城公園の梅林を撮る～

写真部



Vサインをしているような梅。
Wの枝はさすがにありませんでした。

倶楽部の写真部会の第2回撮影会が2月25日、大阪城公園の梅林で開かれた。例年なら2月末から3月初めが見ごろだが、この冬はちよつと寒くて開花もずれこんでおり、この日は開花情報でいうと「咲き始め」か「三分咲き」といったところ。それでも参加した12人は、ところどころで咲いている紅梅や白梅にカメラを向けていた。

大阪城公園の梅林は、昭和49年(1974年)に内濠の東に開園。1.7ヘクタールの敷地に97種1270本の梅が植わっており、品種の多さでは西日本随一と言われている。

撮影の前にはまず、写真部会幹事の岡本三さん(昭和57年社会学)による講習・説明会が行われた。花をアップで撮るマクロ近接撮影の方法や望遠レンズを使ったソフトなタッチの撮り方、さらに花にピントを合わせて背景のお城の天守閣をぼかす方法などを熱っぽく解説。さらに岡本さんは、梅と天守閣の構図を黄金分割と呼ばれるバランスよい配置にする写真がぐつと引き立つことなどをサンプルを示しながら説明し、参加者も大きくうなずいていた。

説明会のあとは各自思い思いに撮影。やはり天守閣をバックにというアングルを狙う人が多かったが、可憐な一輪だけをアップにしたり、V字型の枝に連なつて咲く花を撮ったり、着物姿の外国人女性に向かいがちだったり、撮影している人と梅の両方が入るような構図を狙ったりと様々。

酒井敏行さん(平成11年人間科学)は、新しいカメラと三脚を購入してこの日がデビュー。プロ仕様の本格的なカメラではないものの、望遠機能に優れていて遠く離れた天守閣の上階にいる人の顔までわかるほど。



これも華ですが、おい、梅林はどこや



天守閣をバックに記念撮影です



「ごっつう、よう見えるわ」と岡本さん(左)は酒井さん(右)の自慢のカメラにびっくり



てくてくハイキング

時枝奉之(昭45年院・理工研)



金剛山頂葛木神社 (樹氷はなくても雪はありました)

氷と岩場への挑戦と書くとは厳冬の岩壁登攀に聞こえますが、てくてくハイキングが挑戦するのは金剛山の氷と、播磨富士と呼ばれる高御位山(たかみくらやま)の百間岩です。

金剛山の氷を踏みしめて

(2月11日、参加者7名)

金剛山(1125m)は樹氷が見られる最も近い山として有名です。樹氷を見るには大寒の1月が良いのですが、1月は初富士登山として播磨富士の高御位山を計画したので、金剛山は2月となった次第です。

樹氷の季節の休日は登山者が多く、南海バスがフル回転で臨時を増発しても、バス停から改札口まで長蛇の列。何とか乗り込

み千早から村営のロープウエーで稜線を目指す。稜線に着いたが樹氷は無く残念。2日前の下見の時は立派な樹氷があったのですが、2月では必ず樹氷があるとは限らない様子です。

歩き始めて5分もしないうちにテカテカ光る氷が現れ、滑ってどうにもならないのでアイゼンを装着する。金剛山では4本爪の軽アイゼンで十分な

ですが、6本爪の本格的なアイゼンを持ってきたメンバーは、事前に靴に合わせて調整していなかったため装着出来ない事態が発生。バンドでくるくる巻きに縛り付けても直ぐに緩むため万事休す。アイゼンが無いと歩行は不可能なのでロープウエーで下ることを決断されたのは賢明だったと思う。時間を費やしてここで昼食とした。歩

1月の予定が雨天のため3月に変更となった。下見に行ったらコースの前半は重登山靴を履いた私が持て余す難コースなので割愛し、途中の鹿嶋神社から登ることにした。

ここから登るといきなり百間岩の登りとなる。横から見た角度は約30度であるが、上から見ると目も眩む様な急斜面。播磨

高御位山の百間岩は怖かった。ポイント!

(3月10日、参加者10名)



高御位山 (背後が百間岩の急斜面です)

アルプスとも呼ばれる理由が分った。岩の表面はのっぺりして、足掛かりになる物は無く斜面にそのまま立つしかない。こんな鎖もない岩場が一般コースになっっている理由は、この岩は六甲山の花崗岩と違って全く滑らないためであった。滑らないと頭の中では分っていても、急斜面にそのまま立つ

とやはり怖い。地元の小生は平気でこの急斜面を歩いている。高御位山はどの方角から見ても富士山には似ていないが、百間岩だけで満足して終わりの部分も割愛して途中から下山した。頭と尻尾のない登山であったが十分満足し、いつもと違う龍の湯といつものパンダ飯店に向かった。



大阪早稲田倶楽部  早稲田大学校友会大阪府支部